

平成23年度第21回「中村元東方学術賞」授賞式
平成23年10月10日インド大使館

第21回中村元東方学術賞審査委員会報告

審査委員会における選考経過をご報告し、併せて授賞理由を申し述べさせて頂きたいと思っております。

さて、この度の選考に際しましては、〈「中村元東方学術賞」審査委員会委員〉の先生方の他に、過去20回にわたりまして東方学術賞を受賞された方々にも、「中村元東方学術賞」に相応しい功績のある研究者の推薦方をお願い致しました。諸先生から推薦された研究者は、それぞれにすぐれた業績を挙げられており、選定は困難を極めましたが、慎重審議の結果、皆様にご案内状でご報告申し上げましたように、第20回の中村元東方学術賞を

齊藤明東京大学大学院人文社会系研究科教授
に差し上げることに決定致しました。授賞理由は以下の通りであります。

授 賞 理 由

齊藤明博士は、1950年のお生まれで、博士は東京大学大学院印度哲学専門課程において修士課程を修了し、博士課程の3年次に当たる1981年から、オーストラリア国立大学（キャンベラ）のアジア研究学部に留学し、主にインド中観学派の思想および思想史研究を軸に、この30年の間、意欲的に研究を積み重ねてこられました。

東京大学では高崎直道教授を指導教官として研鑽を積まれましたが、オーストラリア国立大学では、ドゥ・ヨング教授の指導の下で、博士論文 *A Study of the Buddhapalita-mulamadhyamakavrtti* を完成され、このブッダパーリタ（仏護）作の『中論注』の詳細で貢献度の高い研究により1984年にPh.D.の学位を取得されました。

齊藤博士の研究は、この学位論文にも顕著ですが、サンスクリットを中心とするインド語はもとより、チベット語および漢訳に対する批判的かつ厳正な読解を大きな特色としています。それに加えて、博士が思想研究に求められる鋭い分析力と、幅広い思想史的な視野を併せもっております。そのために博士の多くの研究に緻密さとともに、斬新さと独特の奥行きを与えています。

さて、博士の研究業績にはいくつかの柱があります。その第一が、専門とする中観思想および思想史研究に関する研究成果です。ナーガールジュナの主著である『中論』偈頌の比較研究、ブッダパーリタ注の研究、敦煌出土チベット語文献の中に博士自らが発見したシャーンティデーヴァ作『入菩薩行論』の初

期本の研究にくわえ、近年ではバーヴィヴェーカ（清弁）の主著である『中観心論』とその自注の研究を重ね、バーヴィヴェーカの思想解明に貢献しています。また、これらの研究を通して博士は、ナーガールジュナを「中観学派」の開祖と捉えてきた従来の研究に対して、文献学および思想史的な視点の両面から、新たな結論を導いています。すなわち、紀元後 1-2 世紀に活躍したナーガールジュナを大乘仏教において最初期にアビダルマを確立した論師と位置づけ、それを受けて 4-5 世紀に瑜伽行唯識学派がまず成立し、その後さらに 6 世紀に入ってバーヴィヴェーカにより中観学派が名実ともに確立されたという思想史的理解が相応しいことを論証しました。

博士の研究の第二の柱は、この中観思想史研究を中心とした、チベット語文献の研究です。これには敦煌出土写本、あるいは西チベットのタボ寺写本所蔵のチベット語文献なども含まれます。

斎藤博士の研究の第三の柱は、大乘仏教の起源と実態をめぐる研究です。、*Acta Asiatica* の編集、シリーズ大乘仏教の刊行などを通して、その成果を公にし、国際的な発信と社会的還元という、近年人文学に期待されている要請に見事に応えています。また、これに関連して斎藤博士は、従来未解明であった観音の語とその意味、またその起源をめぐる考察を行い、同菩薩が梵天勧請を受けて世間を観察した仏陀に起因するという画期的な論証を行うとともに、観音の原語が元来「アヴァローキテーシュヴァラ（観察することが自在である〔菩薩〕）」であったと結論しています。この問題もまた大乘仏教の実態に関わる博士の重要な貢献であると思います。

博士が近年手がける注目すべき研究の第四の柱は、代表的な仏教用語に関する、定義的ともいえる主要な用例の精査と、それにもとづく日英両語による現代語訳の提唱があります。これについては、本年に入って、仏教の基本的な術語を整理した『アビダルマコーシャ（俱舎論）』の五位七十五法に関して、貴重な成果を公にしました。この成果は出版物の形とともに、所属する研究室のホームページ上で、電子媒体の形で公開されています。現在、多くの研究者および関連機関の協力をえ、また所属研究室を研究拠点としながら、本年度から 5 年間のプロジェクト（科学研究費・基盤研究(S)）により本格的な共同研究を始動させたと聞きます。これもまた、仏教思想を広く社会に開きながら、国際的な研究協力のもとで、難解ともいえる多くの、重要な仏教用語のもつ意味を検証し、混迷の度を深める現代に仏教思想の意義をあらためて訴え、再評価を促そうという壮大で、きわめて現代的な研究プロジェクトとして歓迎されるものと思います。

最後になりますが、博士には三重大学時代から今にいたるまで、西洋哲学、

倫理学、中国思想、日本思想、科学史等の研究者とともに「魂」「同一性」「情」「有限と無限」「自然」また、脳死・臓器移植問題等のテーマで研究会を重ね、専門の立場から、共著の形で多くの学際的な論考を公にしています。これもまた、研究・教育の両面にわたる斎藤博士の活躍と貢献を物語るもので、これからの人文学の方向を考える上でも、その意義は大きいと考えます。

以上、斎藤明博士の中観思想および思想史研究のみならず、ひろくインド仏教思想研究に新生面をひらかれたご功績は、中村元東方学術賞にまことに相応しいものと判断され、今回の授賞となった次第であります。